

\*\*\* 記 事 \*\*\*

例会記録

平成十六年六月例会

平成十六年六月二十六日

順天堂大学医学部

一、日本各地に残る江戸時代・明治時代初期の薬箱

中村輝子、遠藤次郎、ヴォルフガング・ミヒェル

一、産婆が書いた通俗衛生書『産前産後衛生心得』（明治三五年刊）について

平尾真智子

七、八月例会 休会

例会抄録

産婆が書いた通俗衛生書『産前産後衛生心得』（明治三五年刊）について

平尾 真智子

産婆と看護婦は同じ女性の医療専門職であるが、日本の場合、異なる発生、職業化をたどっている。それぞれ独立した職業であるが、産婆の歴史と看護婦の歴史は相互に関連があ

る。産婆規則の構造は看護婦規則に影響を与えているし、両者の教育は産婆看護婦学校として同一の場所で行なわれることが多かった。看護婦規則制定後、看護婦規則改正の動きがあったが改正にはいたらなかった。同様に産婆規則改正運動も行なわれているが改正にはいたらなかったという似たような経緯をたどっている。

専門職としての主体的な活動を見てみると、看護婦自身が書いた看護書は明治二〇年代に三冊（一冊は翻訳書）あることが判明している。初期産婆教育に用いられ医師によって書かれた本の紹介は『看護史』（医学書院系統看護学講座別巻九）に載っているが、産婆自身が書いた本はあるのか疑問に思い調べてみることにした。その結果、明治期に産婆が著者になっている本を一冊見つけ出すことができたので報告する。

産婆は女性の医療職としては最も早く法的な整備がなされた。明治七年の医制に身分が規定されているし、産婆の教育は明治九年に開始されている。その後各府県で産婆規則が公布され、明治三二年に勅令産婆規則が発令されている。登録産婆数は明治三四年で約二万三千人である。

『産前産後衛生心得』は明治三五年に発刊された。表紙に記された著者は中央看護婦会長松本安子である。表紙には「東京中央看護婦会蔵版」、裏表紙には「中央看護婦会蔵版」と記されている。この看護婦会に関しては、明治三十一年の『中外医事新報』に中央看護法講習所の規則が載っているが、この講習所に付属している中央看護婦会のことと思われる。緒言

の前には産婆松本安子と記している。奥付には著者松本安子と記している。看護婦会と産婆の関係は不明であるが、産婆松本安子は看護婦会長をしている。正規の産婆教育を受けた人物と思われるが、教育をどこで受けたかはわからない。関は婦人科専門ドクトル宮田修治（緒論の前にある名前は宮田守治）となっている。現時点ではこの人物については不明である。発行所は修学堂書店（東京市神田区表神保町）で、価格は四〇銭である。本の大きさは縦一八・五センチ横一三センチである。本文は二二頁で終了し、奥付があり、そのあとに修学堂出版図書目録が三六頁分付いている。その広告内容を見ると、英語・英学関係、法学関係、学校案内、問題集となっており、医学書が専門の書店ではない。医療関係書としては他に『通俗衛生顧問』があり、また今回と同じ婦人科専門ドクトル宮田守治先生中央看護婦会松本安子先生の両者で、『男女生殖健全法』が著わされていて、定価一円一〇銭の広告がある。

『産前産後衛生心得』の目次は、男女の生殖器の構造、月経、婚姻、交接、性病、妊娠中の摂生、分娩、産後の生活、育児などとなっている。緒言には、夫婦は人倫の大本であり、一家・一国もこれから成る。一家の興敗・一国の盛衰も夫婦の行ない如何によって生ずる。子孫繁栄、国民健康、国家富強には基、素養が必要である。夫婦の健康は強健なる子孫につながり、家門が繁栄する、と述べている。

本の内容は正確で幅広い知識を持った人物が書いたと思わ

れる。正しい解剖生理学の知識があり、当時の榊順二郎、浜田玄達、長与専斉、金杉英五郎などの調査が盛り込まれている。また外国の統計、外国の研究者（初潮年齢、結婚年齢の統計など）も取り上げられている。内容では妊娠中・産後の養生、母乳の勧めなどは現在にも通じる考えであり、避妊、マスターベーション、頻回な性交渉などについては批判的な見方をしている。明治三五年頃の母子衛生の状況として、妊娠中の胎児死亡の原因は梅毒、薬毒、母体の失血、窒息、胎盤卵膜及び子宮内膜の疾患、外傷を上げている。著者の幅広い教養を示すものとして、ミル、ダーウィン、シヨールペンハウエル、シュルクスピアのマクベスなどがでてくる。漢字にはふりがなやいみふり（例えば「月経痛」に「めぐりいたみ」のふりがな）がついて一般向けにわかりやすく書いている。本書には月別の胎児の大きさの図が二頁分挿入されている。病気のことも自分の言葉で説明している。たとえば、梅毒については、症状の説明のあとに「医者の方にてはこれを第一期梅毒といひ」という表現をしている。

本書の意義として、産婆自身が受けた教育と体験をもとに産婆自身の名前で書いた一般向けの衛生・啓蒙書であると考えられるが、一九世紀ヨーロッパの知識人に関する教養などは、当時の産婆の教養としては考えにくいことから、別の著者が産婆の名前を借りて書いた可能性も考えられるので、今後も研究を継続していきたい。

（平成一六年六月例会）